

# 伏木曾我

季は	地は	ツレ	ツレ	前
五月	駿河	シテ	ワキ	大磯の虎
		曾我十郎祐成	従者	獵人

「露と消えにし夏草の。く。茂みが原を尋ねん。

ツレ  
「是は大磯の虎と申す女にて候。さても曾我の祐成  
過ぎにし五月の末つかたに。富士の裾野にて討た  
れ給ひぬ。妹脊の中とてなどやらん。唯かりそめ  
の袖の移香。なれし涙も晴れやらぬ。雨もほどふ  
る日数へて。七日々々の弔ひも。名残程なくはや  
也ぬ。せめては彼兄弟の。果てにし跡を尋ね行き  
て。一返の念仏をも申さんと。今日思ひ立つ旅衣。

袖しをれ行く朝露に。野を分け山をこゆるぎの。  
急ぐ心ぞあはれなる。

歌  
「別れし空は五月雨の。別れし空は五月雨の。古屋  
の軒の忍草。かれぐなりし契りの。末はそこと  
も白雲の。富士の裾野のかりくらの。跡はいづく  
の程やらん。く。

「御急ぎ候ふ程に。是は早富士の裾野井手の里にて  
ありげに候。又あれより狩人の來り候。暫く御待

あつて。所のやうをも御尋ねあらうするにて候。

シテサシ

「夕日西に絶え残つて。鳥の声かすかに。狩場の末

もほのかなる。山は富士浦はおりたつ田子の海。

一声  
「浮島が払ひかねたる草の露。

地  
「しげみが原の狩衣。

シテ  
「袂すゞしき氣色かな。

ワキ詞  
「いかに是なる狩人。富士の裾野井手の里とはいづ  
くを申し候ふぞ。

シテ詞  
「不思議やなさして人をも伴ひ給はで。此山中に分  
け入り給ふは。いかさま曾我の祐成に情深かりし。  
大磯の虎御前にてましますな。

ツレ  
「恥かしや何とて知しめしたるらん。此有様にてそ  
れと名のらば。此世に亡き人までの。名も如何な  
らんつゝましや。

シテ  
「いや包めども。袖にたまらぬ白玉は。人を見ぬ目  
の涙のおもて。

ツレ 「袖のけしきも打ち煙る。

シテ 「よそめ知らるゝ富士の嶺の。

ツレ 「思ひ内にあれば。

地 「色外にあらはれて。く。かくれなかりし祐成の。  
その妻衣と菊の名の。曾我の人々の。御跡ならば  
いたはしや。此方へ入らせ給へや。御道しるべ申  
さん。

シテ詞 「是こそ富士の裾野井手の里にて候へ。又是なる草

の少し見え候ふこそ。祐成兄弟の果て給ひたるし  
るしの塚にて候へ。よくく御弔ひ候へ。

ツレ 「過ぎにし五月の頃なれば。蓬薄のせうく生ひて。  
いたくも繁らぬ所なれば。疑ふべきにもあらず。  
我も同じ苔の下に埋もれなば。今更かゝる思ひは  
せじ。火の中水の底なりとも。此世の中にましま  
さば。などか言葉をかはさざらん。

地 「黄泉いかなる所ぞや。一たび行きて帰らざる。中

有の別れにたへこがれ。悲しび給ふ有様は。よそ  
の見る目もいたはしや。げにや胸は富士。袖は清  
見が関なれや。煙も浪も立たぬ日も。なしとよみ  
しも理や。かくて夕陽たえぐの。雪のけ富士お  
ろしの。音もはやくれはとり。あやしき人と見え  
つるが。其まゝやがて祐成の。墓所に立ち寄り草  
むらの。露消えくとなりはてゝ。ゆくへも見え  
ずなりにけり。く。(中入)

ツレ詞  
「ふしきや今の狩人の。かき消すやうになりたるぞ  
や。

歌  
「是に附けてもなつかしや。く。今宵はこゝに草  
薙。思ひを述ぶる面影の。添寐の枕片敷きて。夢  
の契りを待たうよ。く。

後ジテ

「松陰の涼しき道はあるなるに。修羅の巷は物うか  
りけり。いかに虎御前。祐成こそ参りて候へ。

ツレ  
「ふしきやな草の枕も露の間の。まどろむ隙もなき

うちに。祐成の來り給ふぞや。あらふしきの事や。

シテ「心ざしの至る時は山川万里も遠からず。ましてや

こゝは亡き跡の。

ツレ「うき身の露の置きどころの。

シテ「神さへ鳴りてけうとけれども。

ツレ「それにはよらじ妹脊の契りの。

シテ「たま／＼あふ夜に。

ツレ「鳴る神も。

地「思ふ中をばよも避けじ。たとひ野の末山の奥の。

雲のはてなりとても。君と住まばもろこしの。虎  
ふす野辺はなほ。草の枕もなつかしや。いつまで  
もなく。長かれかしと思ふ夜の。明け易き頃ぞ恨  
みなる。

クリ地

「げにや輪廻の妄執の。業につたなき恋慕の思ひ。  
涙にくるゝ暗路のうちに。夢物語申すなり。

シテサシ「むかし在原の業平此東路に下り。

地

「時知らぬ雪を。かのこまだらと詠ける。夏野の鹿を取らんとて。富士の裾野に御出であり。

シテ「在鎌倉のともがらは申すにおよばず。

地「遠国遠里の人々まで。雲霞の如く棚引きて。浮島が原の草も木も。靡き洩れたる方もなし。

クセ「我等野に伏し山に隠れ。敵の通路よそながら。見る時もあれば思ひかくれども。猛勢なれば叶はずして。過しくて年月を。故里の曾我に帰りては。

シテ詞「唯兄弟。泣くより外の事ぞなき。

「かくて七日のかりくらも。名残の日にもなりしかば。あつぱれ敵の祐経に。逢はゞやと便隙を待つ所に。男鹿二つ女鹿一つ。三頭つれて落ち来る。射手も三騎其中に。大柏の水干に。

地「秋二毛の行騰に。烏黒なる馬に乗り。花やかなるは誰やらんと。見れば敵の祐経なり。うれしき心もそぞろきて。鞭に鎧を揉み合はせ。物あひ近く

なりしかば。弓打ち上げて引かんとするに。不運の至りにや。伏木に馬を乗りかけて。屏風をかへしてかつぱところべば。弓手に下り立ちて。手綱にすがり馬を引つ立てゝ。又打ち乗りておくれを見れば。敵はしがきに隔たりて。まぶしの射手に馳せ加はつて。物あひ遙かにのびたりけり。弓折れ矢尽きてせん方もなく。日も既に呉竹の。其夜の夜半ばかりにや。井手の屋形に忍び入りて。やすくと敵を討ち終る。本望遂げし身の。其まゝ土中の屍となつて。裾野の草に埋もれぬれども。名をば富士の嶺の。雲井にあげて。人のほまれは大磯の。虎のうそぶく松の風。虎の嘯く松風や。富士おろしに。夢はさめてぞ明けにける。